文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.8, No.1, pp.113～149, 2006.12

# 実践的教育研究プログラム「東海道五十三次ウォーク2006」の概念化

小　栗　俊　之*

Key Words: Tokaido 53-tsugi, Walking, Outdoor Education

## はじめに

2006年夏,「東海道五十三次ウォーク2006」が開催され，成功裡に終了した。

実施期間は８月23日（水）から８月29日（火）までの７日間。行程と距離は静岡県・島田宿から愛知県・岡崎宿までの約150Km。参加人数は一般参加者と学生・教職員実行委員の延べ人数を含めて約350名となった。５回の経験を経た東海道五十三次ウォークはどのような教育的意義があるのか，その本質は何か，その成果は何かなど，実践的教育プログラムを実践に留まらせるのではなく，概念化を図る必要性があるのではないだろうか。

日本野外教育学会理事の佐藤初雄氏は，今後の野外教育における研究動向について以下のような示唆を与えている。(1)

2005年は野外教育及び自然体験活動のビッグバンであった年と思われるが，これからは，劇的な変化を遂げていく社会状況に見合う野外教育を展開していく必要性あるということを述べ，さもなくば，野外教育の存在は世から必要とされなくなっていくことだろうと警鐘を鳴らしている。また，周りを見ながらこれからの野外教育を考えていかなければ，社会から取り残され，いずれは消滅していくことになるだろうと述べている。したがって，野外教育に携わる者は，専門家だけの内向的なものから，より開かれた外交的なものへと変貌を遂げていかなければならず，社会的な課題に対しても積極的に関わり，その成果もあげていかなければならないとしている。そのためには，社会で何が問題になっているのか。その課題に対してどのような取り組みが効果的であるのか。野外教育に携わる者としてどんなことができるのか。その実施のためには，どのような内容にすべきか。その効果をどのように測定すればいいのかといったこと

＊人間学部保育学科

を研究していかなければならないとし，今までの，野外教育の教育効果を検証する研究やその指標作り研究に重点が置かれていた現状から一歩進んで，これからはより社会の課題に対して，どうであったかというところに視点を置いた研究がなされていくことを期待していると述べている。

そこで本稿では，①野外教育の理念，目的，必要性を明らかにしながら，実践的研究である「東海道五十三次ウォーク2006」を分析・検討し，野外教育における「東海道五十三次ウォーク」の位置づけと意義を検討していくこと，②学生実行委員によって企画・運営された内容を基に，野外教育及びウォーキングの理論と結びつけること，③この行事は「大学教育高度化推進特別経費」として文部科学省から助成を得ている。そこで平成17年度私立大学教育研究高度化推進特別補助審査要領，平成17年度教育・学習方法等改善支援経費―教育・学習方法等の改善計画及び平成17年度補助事業成果を報告すること。

以上３点を目的とし論述を進めていきたい。

## 第１章　「東海道五十三次ウォーク」と野外教育

### 1―1 「東海道五十三次ウォーク」とは

東海道五十三次ウォークは，文字通り「旧東海道」をルートに設定し，「ウォーキング」するものであるが，文京学院大学の東海道五十三次ウォークは，１日約15～20Kmの歩行距離を設定し，学生，教職員，OGなどの参加者が「手形と校旗」をつなぎながら駅伝リレー方式で，各区間を踏破するものである。さらに，ただ歩くだけではなく各行程には史跡や名所散策，地場産業での研修，地域の人々との触れ合い，ウォーキング中のごみ拾いなど，「歴史」「文化」「産業」「交流」「ボランティア」などの要素を組み込んだ，「学び」の場が設定されている。上述の通り，行程終了時の「引継ぎ式」の際には歩き終わった前参加者から，次の日に歩行する参加者へ「手形と校旗」が手渡され駅伝リレー方式で全行程の歩行が成立する。

この東海道五十三次ウォークは，第１回・1994年，第２回・1998年，第３回・2001年，第４回・2004年，そして第５回・2006年と５回の開催経験がある，開催当初，第1，2，3回目までは４年に１回の開催スパンであり，文京版オリンピックと呼ばれた。実は行程が京都三条大橋から東京・日本橋までの全長約500Kmを１ヶ月間かけて踏破するという壮大な計画だったのである。安全対策，労働条件，財政基盤等，諸事情を鑑みた上で，開催スパンを短縮し，第４回目からは１週間程度のイベントに縮小して実施することが理事会により決定された。そして第５回・2006年が今夏に開催された。

特筆すべきことは，この東海道五十三次ウォークは，教員と職員，そして学生の３者協働で遂行される大学行事として位置付けられていること。また，文部科学省より大学教育高度化推進特別経費を得ているということである。それは，大学で行われる教育研究プログラムとして

の意味合いを持つもの，つまり，建学の精神である「自立と共生」を具現化するひとつの手段であるものと理解することができる。

文京学院大学の建学の理念とそれに至るまでの背景はどのようなものであったのだろうか，次節にて振り返ってみたい。また，東海道五十三次ウォークとの関連性は何か。建学の理念との関連性を述べることにする。

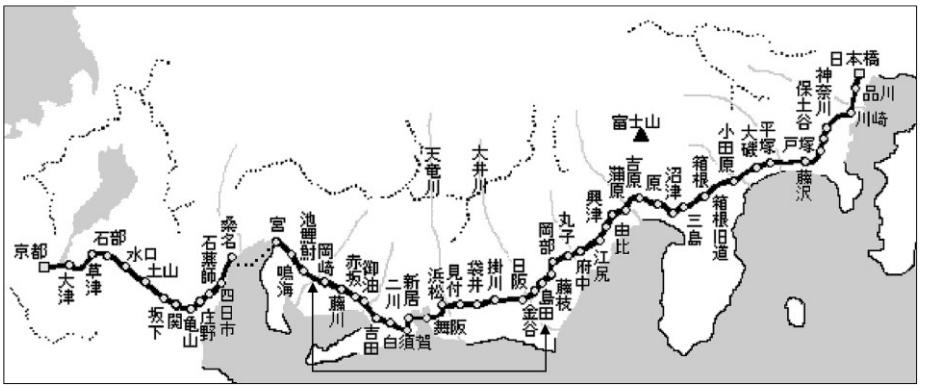
### 1―2　建学の理念と教育方針(2)

大正13年，1924年に「女性に自立の力を」という理念を掲げて，創立者島田依史子氏が文京区本郷の地で教育を始めたことから文京学院大学の歴史は始まる。当時のわが国は，第１次世界大戦後の激動が続く世界の中にあり，人々の，特に女性の間には戦争が暗い影を落としていた。そんな時代に，いやそんな時代だったからこそ，創立者島田依史子氏は「女性にこそ教育が必要だ。教育により，自立の力を身につければ，女性は明るく輝いて，新しい時代が開ける」と先進的な意見を打ち出し，女性のための高等教育に全力を傾けた。

そして現在，文京学院大学は創立者島田依史子氏の理念をしっかりと受け継ぎ，女性から人間へと視野を広げ，男女共学化を図るなど，常に先見性を見据えた教育の在り方を提起している。特に，21世紀のグローバル社会においては，国境，人種，性別や年齢などの違いを超え，すべての人々が「個」として自立すると共に，お互いをよく理解して「豊かに共生」していく真にヒューマンな生き方が求められる中で，文京学院大学が建学以来，一貫して掲げてきた「自立と共生」は，まさにこうした時代の要請に応えるものである。そして文京学院大学はこの理念を形にすべく「より開かれた環境」を目指して，誠実・勤勉・仁愛の精神のもと，様々な教育活動を実践しているのである。

### 1―3　建学の理念との関連性

人間が日常生活を営む上で，また身体活動を行う上で最も基本となるものが「歩行」である。しかし，現代社会においては歩くことが極めて減少し，生活習慣病を引き起こす誘引のひとつにもなっている。同時に都市部においては，徐々に緑が奪われ，その結果，人々と自然との触れ合いも少なくなっている。このような背景から，現代社会に生きる我々にとって歩くことの意味を再認識することは非常に重要なことであると思われる。「東海道五十三次ウォーク」は旧東海道のウォーキングを通して，人間が自然環境の一部であることを再認識し，尚かつ，地域の人々との交流から共生社会を肌で感じ，学びとる参加型の教育プログラムである。「自立の第一歩は，先ず自分の足で歩くことから始まる」の言葉通り，建学の理念を達成するためのひとつの手段として具現化されたものが「東海道五十三次ウォーク」であるといえる。




**図表１**　東海道五十三次の宿場町と今回の歩行ルート
出典：http://japan-city.com/toukai/「東海道地図」より作成。

### 1―4　野外教育の概念，目標及び期待される成果

野外教育については，様々な考え方や捉え方があり得るが，青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（主査：飯田稔筑波大学教授）によれば，(3) 野外教育を「自然の中で組織的，計画的に，一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」と捉えている。尚，自然体験活動とは，自然の中で，自然を活用して行われる各種活動であり，具体的には，キャンプ，ハイキング，スキー，カヌーといった野外活動，動植物や星の観察といった自然・環境学習活動，自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である。したがって，野外教育は，自然体験活動を取り扱う教育領域であると位置付けることもできるとしている。

また，野外教育の目標としては，一般的に，自然に対する興味・関心の醸成，自然と人間の望ましい在り方の理解，自然体験活動の楽しさや技術の習得，自主性，協調性，社会性，創造力，忍耐力の育成など，様々な目標が考えられる。また，青少年を対象とした野外教育は，総じて，青少年の知的，身体的，社会的，情緒的成長，すなわち全人的成長を支援するための教育であるとしている。

ただし，個々の野外教育が，どのような教育目標を持っているかは，社会の要請，組織や指導者の理念によって大きく異なり，対象者の年齢，経験，人数，関心，さらには，実施場所，活動内容等によっても左右される。

さて，東海道五十三次ウォークはこの定義に照らし合わせて野外教育といえるのか。それとも別の教育領域のものであるのか。以下に野外教育の発祥の地アメリカに視点を移し，分析と検討を試みる。

海の向こうアメリカでは野外教育をどのように捉えているのであろうか，江橋慎四郎氏の著書を手がかりにして，歴史を紐解きながら考察してみたい。(4) アメリカにおいて野外教育（Outdoor education）は1940年代に入ってから注目を集めるようになってきた。その後，1950年代から1960年代にかけて，全米・体育・レクリエーション協会（AAHPER）の野外教

育委員長であったJ.Smithらによってその理念と方法が確立された。AAHPERから刊行された小冊子「Outdoor education」の中で野外教育について「野外教育とは野外での学習をいうのであり，天然の諸資源，および野外という場で見出される生活の場と直接結びつく，教師と子どもの学習活動を包含するものである。換言すれば，教育の目標を達成するために，自然環境を楽しみ，理解し，懸命に利用することを含むところの直接的な学習体験により，野外教育は構成される。」と述べられている。つまり野外教育とは，教育の諸目標を達成するために天然の自然や野外を効果的に活用しようとする教育のひとつの手段，方法であると考えられる。

Donaldsonは，具体的な内容として以下の3つの視点を掲げている。Donaldsonの定義を引用しつつ，東海道五十三次ウォークに当てはめて分析してみよう。

野外教育とは，……

① 野外における教育（in outdoor）

② 野外についての教育（about outdoor）

③ 野外のための教育（for outdoor）

以上の3点であるが，吉永宏英氏はこれらに日本の社会と教育の現状を踏まえ

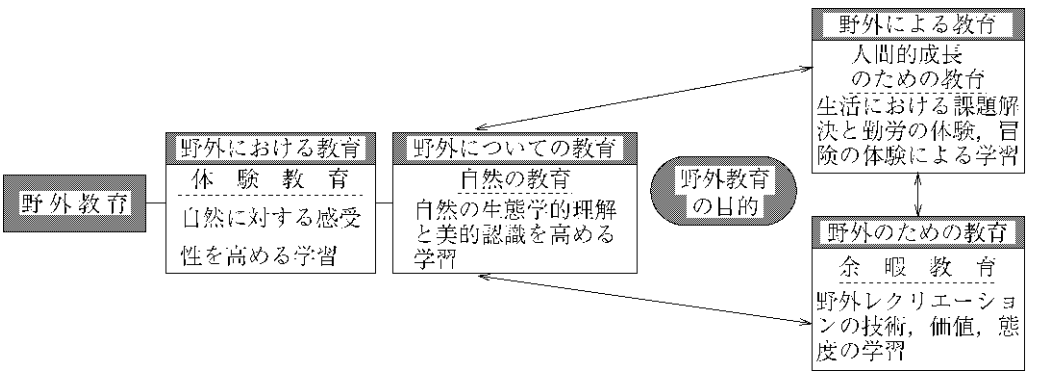
④ 野外による教育（by outdoor）

を加えている。上記4項目はどのようなことをいうのか。以下に要点を述べる。

野外における教育（in outdoor）とは，教室内で行われる授業や講義ではなく，野外の自然を直接学習の教材や教室として行われる教育。

野外についての教育（about outdoor）とは，第1に専門化された単一の教科として捉えられるものではなく，野外についての教育は知識や技術の複合的で総合的な学習であること。第2に教室での間接体験と野外での直接体験が相乗的に機能し合う教育。

野外のための教育（for outdoor）とは，豊かで創造的な人生を送るための余暇の価値学習，




**図表2** 野外教育の主要な内容

出典：江橋慎四郎『野外教育の理論と実際』杏林書院，1997年，13ページより引用。

野外におけるレクリエーションの楽しさを共有するためのルールやマナーの学習など，野外におけるレクリエーションの技術的な学習に留まるものではないもの。

野外による教育（by outdoor）とは，野外での共同生活を通して個人的な成長を促すことを目的とする教育。[5]

東海道五十三次ウォークは，……

○教室，大学から飛び出し，さわやかな風を頬で感じ，渇いたのどを潤す水の有難さ，新鮮な空気を味わい，ゆっくりとしたスピードで周りを観ながら，河のせせらぎの音から涼しさを感じ，「旧東海道」という場で（in outdoor），

○「歩行」という手段を用い，健康・体力の保持増進（保健・体育）のみならず，歴史を学び（社会），自然や環境についての知識を体感し（理科，環境），地域の人々と触れ合いながら（共生，福祉），宿場町に思いを馳せ（経営），歩行終了時にはゴールテープに思いを綴る（国語），などを含んだ複合的・総合的な学習を，机上の理論と直接体験による実践を結びつけ（about outdoor），

○ウォーキングという技術の習得だけではなく，歩行時における規範やルールを守り，マナーを守りながら行事をより安全に楽しむ態度を養い，生涯を通して親しみ，楽しむことのできる，いわゆる生涯スポーツの獲得に向けて（for outdoor），

○暑さに耐えながら肉体的な課題を解決し，未知の距離と道を踏破するという目的に向かって挑戦する勇気を培い，一方で，集団生活及び歩行時における集団活動から「個」より「公」を考える公益の優先を学ぶ（by outdoor）ものである。

以上を踏まえると，東海道五十三次ウォークは野外教育であると位置付けられよう。

上記は，Donaldson と吉永宏英氏の野外教育の定義に照らし合わせ，東海道五十三次ウォークを分析してみたが，J.Smith による野外教育の視点は[6]「直接的な体験」（野外教育の基本的な特徴は学習経験に直に触れるということ），「発見・探求・冒険」（何かを見つけ出すという興奮を味わう），「感覚による学習」（五感を働かせる），「自然な活動」（自然の変化は予測不可能，学習者はそれに心が動き，考えさせられる。そのため動機付けのための人為的な行為が不必要），「興味の深化」（自然に対する興味・関心からすべての事象に対して没頭，熱中，夢中になることができる），「実在性」（すべては目の前にある，写真や絵や図表や言葉ではなく，すべてが“実際”），「学習者がもっとも活発」（野外教育は多くの意味ある活動の機会を学習者に与える。対処・挑戦・冒険・克服）である，といった 7 つの特徴を挙げているが，東海道五十三次ウォークはこれらすべての要素にも当てはまるといえるだろう。

また，野外教育（Outdoor education）という言葉に1958年にアメリカで触れ，初めて日本に紹介した江橋慎四郎氏は「ひとつの教科ではなく教育の方法であること」「直接体験を通じて学ぶという観点に立っていること」「予期せざる学習場面に遭うことが多い」「総体としての

自然，環境の理解」「創作・創造の機会を豊かにすることができる」と定義している。以上，Donaldson，J.Smith，江橋慎四郎３氏の理論に照らし合わせながら東海道五十三次ウォークを分析してみると，当てはまると思われる部分は多分にあると思われる。

現在，我々は日常生活の中で自然と触れ合い，自然を活かして活動する機会が非常に少なくなってきている。その結果，自然体験の不足した子どもたちの問題行動など，社会に及ぼす影響も指摘されている。かような意味合いにおいて，東海道五十三次ウォークというひとつの教育プログラムを学生に提供し，動機付けを図ることは重要なことであると思われる。

### 1―5　「野外教育に期待される成果」
### ―文部科学省生涯学習局青少年教育課・青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議より―

冒頭に野外教育の概念を述べたが，野外教育の理論と日本における歴史的背景を踏まえ，文部科学省生涯学習局青少年教育課・青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議から「青少年の野外教育の充実について」の「野外教育に期待される成果」(7) が改めて報告されている。

本節では，東海道五十三次ウォークにおける実際の歩行写真（特に，第２回1998年と第３回2001年分を中心に）と研究報告を比較検討しながら関連性を分析していきたい。

この報告は，前述した各研究者の理論と重複する部分も多々あるが，現在の社会状況や子どもを取り巻く環境から，改めて調査研究された成果報告である。

1）感性や知的好奇心を育む

峠，石畳の歩行は参加者にとって初めての経験ではなかっただろうか。まさしく旧東海道を歩行しているという感覚に包まれたに違いない。この非日常的な環境に浸るだけで，自然を感じ取ることができたのではないかと思われる。旧東海道という環境設定を行うだけで，自然が学生を教育してくれる（写真１，2）。

野外教育の最大の特徴は，自然の中で，自然を活用して教育が行われる点である。自然については，自然そのものが教育力を持っているといわれる。すなわち，自然の美しさ，雄大さ，神秘性，厳しさなどは，直接人間の五感に働きかけ，人々に感動や驚きを与えるものである。野外教育におけるこうした感動や驚きの体験は，青少年の感性を育み，また，知的好奇心や探究心を育むものといえる。

2）自然の理解を深める

身体の約60％は水分である。本学の東海道五十三次ウォークは学年暦上，夏期休暇中に行われる。暑い環境の中で実施されることから，参加者は「水」の有難さを一番に感じることであろう。渇いたのどにつめたい水分が注がれる感覚を体感することにより，それが環境を考える

**写真 1**　石畳

**写真 2**　おぼつかない足元

**写真 3**　水分補給

**写真 4**　身を清める

一因となればと思う（写真 3，4）。

自然の中での体験的活動を通して，青少年は，動植物，水，土，気象などに関する知識やその関連性，さらにはその重要性を学ぶことができる。こうした自然に対する理解は，日常生活における環境保全や自然愛護への積極的な態度を培い，今日問題となっている地球規模の環境問題への認識を高めることとなる。さらには，生物としての人間の内的しくみや生命の尊さを学ぶことにもつながる。

野外教育は，自然現象や自然のしくみを総合的に学び，環境問題への認識を高める最良の機会である。

3）創造性や向上心，物を大切にする心を育てる

写真 5 の歩行隊の隣に移っているのはJR東海道線である。日ごろ電車で通過する道を何時間もかけて歩行することにより，物質的な豊かさを再認識することになるだろう。約20Kmの距離は電車であれば20分程度だが，その距離を歩行するとなると約 5 時間，休憩を挟むと 6 時

間弱はかかる。写真６のように，途中で体力の限界を感じることもある。しかし，それを乗り越える努力をすることが，今の学生に大切な経験となると思われる（写真５，６）。

**写真５**　歩行と電車

**写真６**　休足

野外教育は，非日常的な自然の中での素朴な生活や活動が伴う。物質的な豊かさや便利さの中で暮らす青少年にとって，こうした素朴な生活や活動は，不便なものであり，時には苦痛を感じることもある。

しかし，このような環境のもとでの困難を乗り越える体験は，青少年に成就感や達成感をもたらし，向上心や忍耐力を培う。

また，自然の中での素朴な生活は，水や火の大切さ，物を工夫して使うことの楽しさなど，創造性や物を大切にしようとする心を育てるとともに，素朴な生活の楽しさなどを実感する場ともなる。

4）生きぬくための力を育てる

足に痛みを感じる。見てみると足の裏や踵に“まめ”ができている。行程を完歩するには，手当てをして，痛みに耐えながら自分の足で歩き通すしかない。あきらめればそれまでである。それは自分が決める。危険を回避し安全に完歩するためには，自己責任，自己管理が第１条件となる（写真７，８）。

**写真７**　筋肉疲労とまめ

**写真８**　疲労困憊

青少年は，自然の中での様々な活動の実践・反復を通じて，知識や技術を単なる理解としてではなく，いわば生活の知恵として身につける。また，このような知恵は，災害などの緊急時において，生きぬくための力ともなる。

さらに，自然の中での各種活動は，危険を回避したり，安全を確保したりする能力や，自らの安全は自らが守るという意識を高める。

5）自主性や協調性，社会性を育てる

旧東海道はアスファルトで舗装された日常歩き慣れた道とは違う。足元がおぼつかない。そんな状況が多々ある。助け合う気持ちも大切となる。東海道五十三次ウォークの各行程は30名程度で設定されているが，個人単位で歩くというよりは，その約30名がひとつのチームとなって歩き通し，次の区間の参加者に「手形」と「校旗」を引き継ぐ使命がある（写真 9，10）。

**写真 9**　峠と協力

**写真10**　全員完歩

野外教育では，一般的に小グループでの生活や活動が主体となる。こうした生活や活動では，自分のことは自分でする，仲間とよく相談し協力する，弱い者を助ける，といった態度や行動が求められる。このような生活や活動の実践・反復は，青少年の自主性や協調性，社会性の育成に大いに役立つものである。

6）直接体験から学ぶ

お味噌汁はご飯とならんで日本人の食事の基本であろう。ではその味噌はどのようにして作られているのか（愛知県岡崎市，八丁味噌工場）。知っている人は多くない。街道沿いにある地場産業に立ち寄り，「学び」の場を設定し「直接現場で学ぶ」。これが本行事の特徴である（写真11，12）。

「爽やかな風」「風は気持ちがいい」，言葉を覚える，教科書で学ぶ。それはどんな感じがしたかな？と聞かれたとき答えられるかどうかは，その場で，その経験をした人にしか解らない。

近年のめざましい情報化の進展は，人々の生活に豊かさをもたらしている。しかし，その一方で，子どもたちのテレビゲームへの没頭に見られるように，間接体験や擬似体験の増加など，

**写真11**　地場産業見学

**写真12**　浜辺の風

情報化の「影」といわれる負の影響が生じており，今後は直接的な体験が必要となってくる。様々な直接体験の機会を提供する野外教育は，こうした情報化の「影」の部分を補う機会として重要である。

7）自己を発見し，余暇活動の楽しみ方を学ぶ

旧東海道の中で「海路」，つまり，唯一陸道ではない海の道がある（桑名～宮）。本行事ではそこを当時の旅人がそうしたように「船」で渡る（2001年時）。車で移動はしない。楽しい体験でもある（写真13）。

日ごろ，神社の木陰に腰を下ろしお弁当を友人と食べるという経験をしたことがあるだろうか。おいしいと感じるのは何故だろう。眠っていた感覚を呼び起こすことにもなるのではないだろうか（写真14）。

**写真13**　海路

**写真14**　神社の木陰での昼食

野外教育で取り扱われる各種の自然体験活動は，青少年にとって新鮮であり，印象深い体験となることが多い。こうした新しい体験によって，青少年は，これまで気が付かなかった自己の長所や能力を発見することができる。また，この時期の体験は，生涯にわたって余暇活動を楽しむための新たな興味・関心を喚起し，健全で豊かなライフスタイルの形成にも資するものとなる。

8）心身をリフレッシュし，健康・体力を維持増進する

学生たちは朝自宅等から出発し大学に到着する。目的はそれだけではない。時間になると講義が始まる。レポート課題が与えられる。それが夕方まで続く。そんな日々が繰り返される。東海道五十三次ウォークは歩行を通して，目的地に着くことが目的である。完歩することは容易ではない。しかし，それをやり遂げた後は達成感と満足感等が得られる（写真15，16）。

**写真15**　体力の保持・増進

**写真16**　歩行と気分転換

今日のような複雑な人間関係や時間に追われるゆとりのない生活から，自然の中に足を踏み入れると，時間的にも空間的にも，落ち着きやすがすがしさを感じさせられる。自然の中での生活や活動は，心身をリフレッシュさせ，健康・体力の維持増進にも役立つものである。

### 1―6　持続可能な社会のための教育（Education for Sustainable Development：ESD）

「国連・持続可能な開発のための10年（ESDの10年）」が2005年にスタートした。

この概念は，2002年に南アフリカで開催されたヨハネスブルグサミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）で，日本の市民と政府が共同提案し，同年12月の第57回国連総会で実施が決議されたものである。現在地球は，持続不可能な社会・地球温暖化や酸性雨などに象徴される環境問題，人権侵害や異文化衝突といった社会的問題，貧富格差をはじめとする経済的な問題など，現代社会に生きる我々は互いにつながりあう様々な課題に直面している。 持続可能な開発を通じて全ての人々が安心して暮らせる未来を実現するには，我々一人ひとりが，互いに協力し合いながら，様々な課題に力を合わせて取り組んでいくことが必要であるという考え方が根底にある。そうした未来へ向けた取り組みに必要な力や考え方を人々が学び育むこと，それが「持続可能な開発のための教育＝ESD（イー・エス・ディー）」である。

ESDとは「持続可能な開発のための教育」を表す「Education for Sustainable Development 」の頭文字をとったものである。この新しい概念は何を目的としているのか。野外教育である東海道五十三次ウォークとの関連性は何かを考えてみる必要性がある。

1980年代に地球環境問題が顕在化し，その原因には自然環境の問題だけではなく，人権や平

和，公平性など，他の社会的問題が不可分であると解ってきた。そこで生態系・自然保護をベースにした従来の自然系環境教育だけでは総合的な環境問題に対応できないと理解され，その中で「持続可能な未来をつくるには」という議論から，国際的にESDの概念が生まれた。したがって，ESDは従来の環境問題が発展したものと捉えることができる。

この根底には環境問題がある。しかし環境とは自然環境だけではなく，人権的環境，平和的な環境，ジェンダー的側面からの環境など，様々な場面を想定できる。図表3に示してあるように，「持続可能な社会づくり」に向けた地球的課題は多種多様であり，それらの課題解決を目指した教育がすべて必要となってくる。環境問題をはじめ，「○○教育」には各固有の解決すべき課題がある。一方で，そこには「育みたい力」「学習方法」「価値観」など共通する部分がある。それがESDの核（本質）である。(8)

ESDの特徴として，学際性・総合性，価値による牽引，批判的な思考と問題解決，多様な方法，参加型の意思決定，地域との関わりの6点が考えられる。阿部治氏(9) は持続可能性を保証する共通の価値（共生・自然の尊重など）を作り上げる力（参加・共有・批判）を新たな学びの手法（参加型・体験型など）を用いて行う活動をESDと考えている。このような考え方や学びは日本では新しいものではなく学校における総合的な学習の時間や，全国各地で展開されている環境や福祉，教育などを総合化した地域づくり，企業における社会的責任行動（CSR）などはESDといえる。

本質である「育みたい力」「学習方法」「価値観」をどのように教育・学習するのかは，

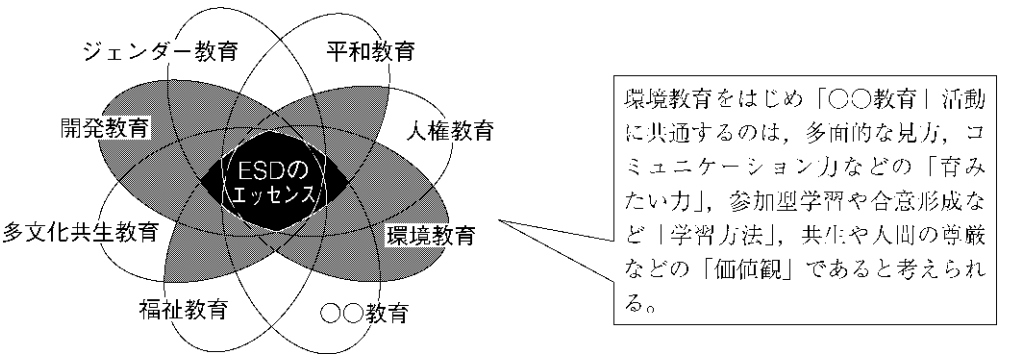
①「複合的領域」からなるものであること。

②持続可能な社会作りのための教育は自然環境教育のみならず，多角的なアプローチによって解決する努力が必要であること。

③学校だけでなく，地域や社会のあらゆる場で誰もが取り組むべき学習であること。

④各地域や個々人の実情に合わせたかたちで行われることが何よりも大切であること。

などを視野に入れて行われることが必要であると思われる。




**図表 3**　ESDのエッセンス

出典：http://www.esd-j.org/whatsesd/2006/05/02より引用。

ESDは，既に国内外の各地で，様々なESDが実践されている。今後，優れたESDがさらに広がり，持続可能な開発が実現できるかどうかは，未来を創る主役である我々一人ひとり次第であるということを認識できるかどうかにかかっている。(10)

### 1―7　環境教育と野外教育の共通点と相違点

ESDの概念を踏まえ，ここでは環境教育と野外教育の２つの類似した分野を検討し，野外教育の独自な教育理念を明らかにしたい。また，野外教育との関連から東海道五十三次ウォークの方向性を考察していく。

J.Kirk らが指摘しているように，環境教育は野外教育を包含する概念として，環境教育＝野外教育という図式が成り立ってしまうことになりそうな気配があるが，前述したESDの考え方を踏まえると，類似した領域ではあるが明確に峻別できそうである。両者はそれぞれ違った独自の教育理念を持ちつつ，本質である「育みたい力」「学習方法」「価値観」は共通するものがあるということである。改めて環境教育の内容と野外教育の内容を照らし合わせて，何を「教育」するかというところに焦点を絞りながら，その違いを見ていこうと思う。

吉永宏英氏は，環境教育の学習段階を以下のように，野外教育の学習内容に照らし合わせている。

| | |
|---|---|
| 野外における教育<br>野外についての教育 | 自然についての感受性を高め，自然の生態学的理解を促す学習 |
| 野外のための教育 | 社会学習：野外レクリエーションの及ぼす自然への生態学的インパクトの理解とそれに基づく余暇における自然利用のルール・マナーの学習 |
| 野外による教育 | 評価・行動化の学習，環境問題の社会的側面の理解と問題解決のための協力の仕方，具体的行動の学習 |

**図表４**　野外教育と環境教育の共通点
出典：江橋慎四郎『野外教育の理論と実際』杏林書院，1997年，22―23ページより作成。

以上のように，野外教育を環境教育に置き換えることのできる部分はある。これらはまず共通した部分といえる。しかし，同氏が述べているように野外教育の目的や期待される効果には，自然愛護や環境保全の態度を養うことなど，環境教育の学習段階の一部が含まれてはいるが，全てではない。環境教育の学習内容には含まれていないものがあると思われる。大きくは，以下の２点である。

①「自己を発見し，余暇活動の楽しみ方を学ぶ」

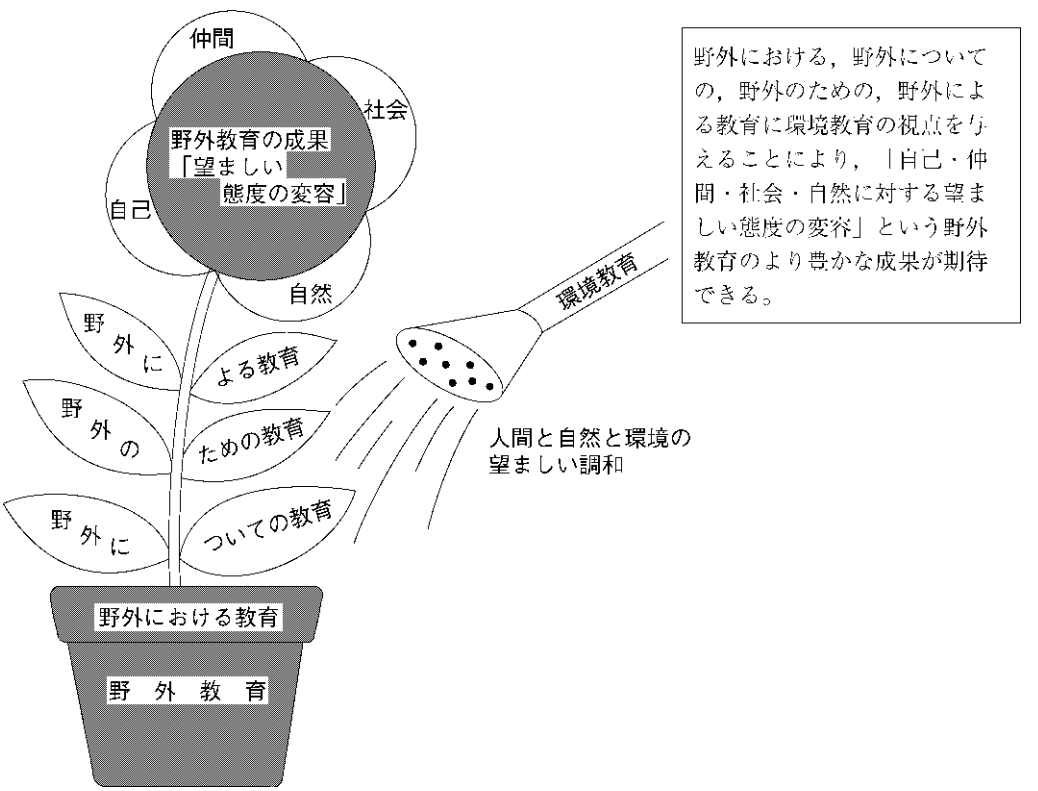
野外での体験は，生涯にわたって余暇活動を楽しむための新たな興味・関心を喚起し，健全で豊かなライフスタイルの形成にも資するもの。

②「野外による学習によって得ることのできる“人間力”」

生活上の課題解決能力や人間関係作りの技術と態度が養われ，プロセスと労働の意味と価値

の理解。自己の可能性と強い信頼に基づく人間関係の発見と自主性創造性の涵養的態度。などの野外教育特有の役割を見失うことがなければ差別化が図られるであろう。(11)

以上の２つの視点は，野外教育の特徴ともいえる観点であると思われる。したがって，前述した様々な野外教育の機能と役割に環境教育の“人間と自然と環境の望ましい調和”という理念がふりそそがれることによって，野外教育の効果がよりいっそう高まると理解すべきであると考えられる。(12) 図表５を参照されたい。




**図表５**　野外教育における環境教育との関係
出典：江橋慎四郎『野外教育の理論と実際』杏林書院，1997年，23ページより引用。

「環境」が最も重要なキーワードである時代に突入している現代社会において，東海道五十三次ウォークの果たす役割は何か。この教育プログラムを手段として，学生に現代社会で問題となっている事柄を歩く行為を通じて訴えかけ，気づきを促していくという段階から，野外教育のひとつの教育目標である「自然を大切に」と理解させるだけではなく，この教育プログラムを通して自然や環境のために行動できる学生を育成していくという視点を導入し，東海道五十三次ウォークに環境教育を組み込んでいくことではないだろうか。加えて，前述したESDの新しい概念を加味しながら今後の東海道五十三次ウォークを考えていく場合，「参加者個々人の意識や態度の変容」を視点としたプログラム運営方法から「経済や社会のあり方の認識と

改善」にまで，その射程を広げていくことが求められる。[13]

そのためには何を，どうすべきか。東海道五十三次ウォークは本番の５回とそれにかかる準備期間（予算作成，下見，マニュアル作成，参加者募集，参加者説明会など）を含めると，12年以上の歳月が流れている。この教育プログラムを安易に「よし」としてはいけない。形骸化の感がある，手段として「東海道」でよいのか，方法論に改善の余地はないのか，今後財政基盤をどのように確保していくのか，労働力の確保は，より効果的な学生への野外教育プログラムの提供は，など課題は多々ある。

野外教育は現代の教育に必要不可欠なものであり，その本質は揺がない。しかし，その容姿は必要に応じて変化させていくことが必要であろう。「時代を超えて変わらない大切なものを残しつつ，時代に即応した形で実施していく。」というスタンスを持つことである。つまり「不易と流行」を見極めることである。

## 第２章　「東海道五十三次ウォーク2006」とウォーキング

### 2―1　ウォーキング活動の次元

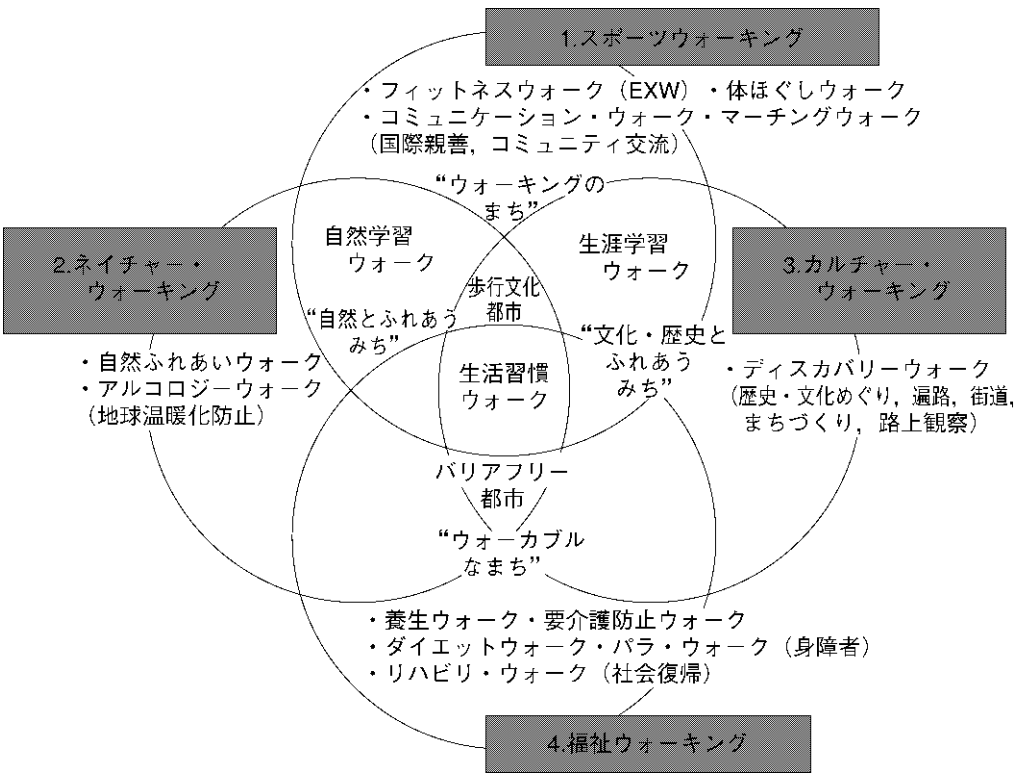
東海道五十三次ウォークは行程の中に歩くだけではなく，「歴史」「文化」「産業」「地域との触れ合い」「ボランティア」などの「学び」の場が各行程に設定されているが，ここで，ウォーキングに視点をあててみよう。

次項図表６にあるように村山友宏氏によると，ウォーキングには幾種類かのスタイルが存在する。それが，「スポーツウォーキング」「ネイチャー・ウォーキング」「カルチャー・ウォーキング」「福祉ウォーキング」である。

「スポーツウォーキング」は，フィットネス，体ほぐし，コミュニケーションやマーチングなど健康・体力の保持・増進を目的とするもの，「ネイチャー・ウォーキング」は，自然との触れ合いや地球温暖化防止など自然環境を目的とするもの，「カルチャー・ウォーキング」は，歴史，文化，散策，観察，まちづくりなど視野，見聞を広めることを目的とするもの，「福祉ウォーキング」は，養成，介護防止，ダイエット，リハビリなどを目的とするものである。この４つのウォーキングの次元は，時として他次元と重なり合い，新しい目的を持つウォーキングへと発展，進化していく。

東海道五十三次ウォークはその性格から，特に，「スポーツウォーキング」「ネイチャー・ウォーキング」「カルチャー・ウォーキング」の３つの次元を含んだものと理解できる。ウォーキングの中でも，いわゆる「複合的」意味合いを持つウォーキングとして捉えられる。さらに，ウォーキング活動の次元を分析すると「自然学習ウォーク」及び「生涯学習ウォーク」に位置付けられる。両者の共通項目は「学習」である。「学習」は別の言い方をすれば，「教育」である。ここからも，大学で行われている教育プログラムのひとつという位置付けがなされてくる。

加えて，東海道五十三次ウォークは現代社会で問題視されている課題を踏まえ，自分自身を見直し，社会を見つめ直し，これからどうあるべきかを考え直していくテーマとコンセプトを持っていることから（これらについては次章にて述べる），改めて創り直すという意味を含めた「レクリエーション・ウォーク：Re-Creation・Walk」といえる部分を含んでいると思われる。




**図表 6**　ウォーキング活動の次元

出典：文部省〔子どもと話そう〕全国キャンペーン協力事業
「子どものウォーキング」フォーラム　テーマ：歩く喜びを通じて生きる力を
2000年１月30日（日）於：早稲田大学大隈講堂
村山友宏氏「歩く五感体験学習のすすめ」会議資料19ページより引用。

### 2―2　テーマ設定と意義

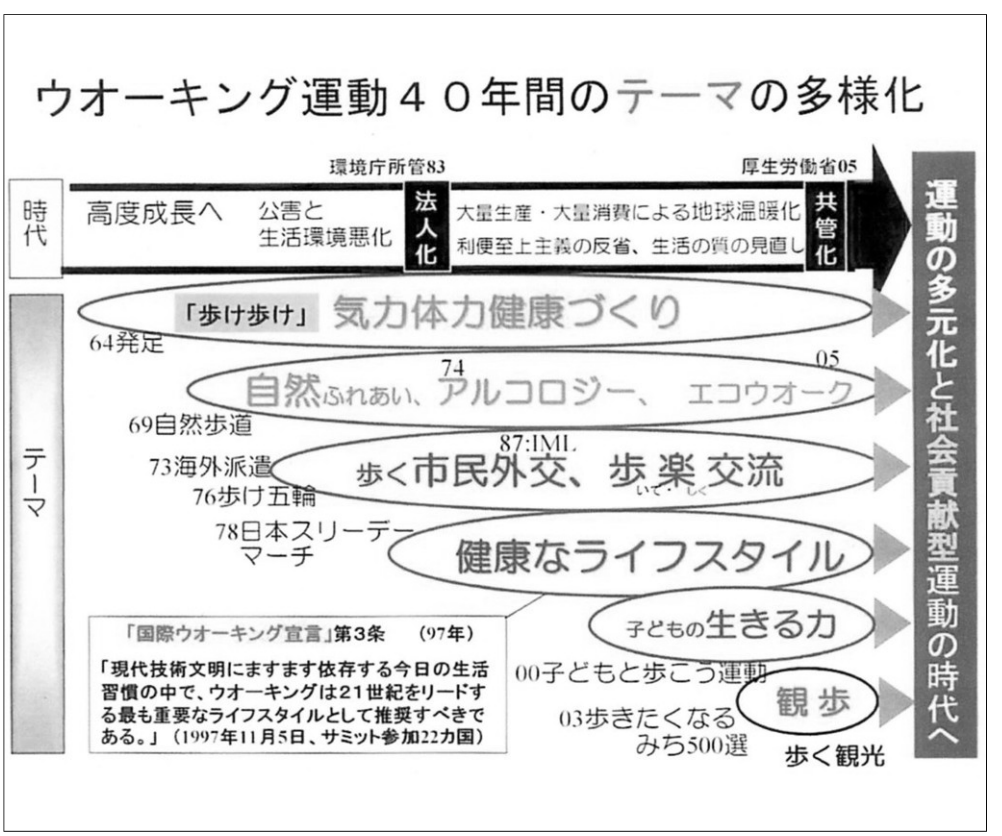
テーマ設定には重要な意味合いがある。それは，野外教育プログラムの目標の明確化といわれるものである。

野外教育プログラムは，ともすれば単なる活動種目であったり，活動種目を配列した日程表であったりする場合が多い。また，野外教育の目標も曖昧な場合が多い。したがって，まず，野外教育プログラムに対する考え方を根本的に改め，目標から活動内容，指導方法等に至る一連のものとして理解することが必要である。そして，この目標の達成にふさわしい活動種目や

指導方法が採用されるべきであるとされている。また同時に，プログラムは，対象とする青少年の年齢や経験，心身の状況によって活動種目が選択され，指導方法やフィールドが検討されなければならない。

このように，野外教育プログラム[14] は，ややもすると，自然の中で行われる各種の活動種目の選択や，その活動種目を時系列に並べた日程と考えがちである。しかし，野外教育プログラムは，単に活動種目や日程を指すものではなく，教育目的，指導方法・指導形態，活動種目等が一体となったものとして考えるべきである。すなわち，プログラムは，単に何をするかだけではなく，何のために，どのような方法で実施するかという視点が必要なのである。また，プログラムをさらに広く捉えれば，そこには，評価や成果の活用といった視点を持つことも大切なのである。

図表７に示したように，日本ウォーキング協会のウォーキング運動40年間のテーマを取り上げて比較検討してみると，1964年は「健康・体力」，1969年は「自然」，1973年の“海外派遣”，1976年の“歩け五輪”を受けて「外交」「交流」，1978年は“スリーデーズマーチ”から「ライフスタイル」，2000年“子どもと歩こう運動”から「生きる力」，2003年“歩きたくなるみち




**図表７**　ウォーキング運動40年間のテーマの多様化

出典：社団法人日本ウォーキング協会広報資料「人も社会も元気にするウォーキング運動」より引用。

500選”より「観光」といったようなキーワードを拾い上げることができる。

これらのキーワードから，それぞれの年代背景によってテーマは異なっているが，それぞれのテーマが今でも活かされ続けており，ウォーキング運動の多元化現象が見られる。また，自己中心的なテーマから地域社会を見つめ直す社会貢献の意味合いを含んだテーマに変化している。このように今後も，社会問題に対してどうあるべきかというテーマが位置付けられてくると思われる。

### 2―3 「東海道五十三次ウォーク2006」のテーマ及びコンセプト
### ―“踏みしめる”に込められる現代社会を背景とした意味―

東海道五十三次ウォークは大学行事として位置付けられており，教員，職員と学生の３者協働により遂行されるものである。今回で５回の経験を経ることになったが，回を増す毎にオーナーシップが学生実行委員会へ移行され，「学生主体」の行事として変化しつつあることは教育効果の現われであると思われる。このように学生実行委員が自主的，主体的に組織を自治し，教育プログラムに参画しながら，企画・運営していくことのできる体制になってきたのは，「４年に１度の開催」から「２年に１度」の開催にシステムが変わったからに他ならない。つまり，２年に１度の開催は「引継ぎが可能」であること「経験者が再度実行委員として企画・運営に携わることができること」，以上２点がメリットとして大きく影響している。

この状況は，一般参加者に野外教育を提供し教育効果を高めるという目的のみならず，学生実行委員の「リーダーシップ養成」「スポーツマネジメント能力」「ホスピタリティの涵養」「相手の立場に立って物事を考え，行動する―おもてなし・気くばり」という部分に大きく寄与している。この行事の最大の教育的効果はここにあるのではないだろうか。

学生実行委員会には行程を設定すると同時に，今回のテーマとコンセプトを考えさせた。それはただ単に歩くだけではなく，「自発的な気づき」を参加者にも促すためである。この「自発的気づき」は体験を提供しただけで終わらせてしまうことのないよう，体験から得られた物事を「経験」として捉え，発展させて欲しいと考えたためである。

さて，歩くという手段を使って導き出された今回の基本理念は何か。学生実行委員会の想いが綴られたテーマとコンセプトを以下に述べることにする。行程同様，以下の内容は本学全学部教授会にて報告がなされたものである。

それは，

【人間が自立し，人生の目標に歩んでいくためには，自己を成長に導くための鍛錬が必要となる。鍛錬するとき，人はたくさんの時間をかけて努力を積み重ねる。なぜなら，簡単には叶わない大きな希望が，そこにあるからだ。望みを叶えるためには，慌てず，あせらず，腰を据えてじっくりと，一歩一歩

“踏みしめる”こと

が大切となる。ここに，人間の自立の根源が存在するのではないだろうか。そして，苦しみに

耐える強さ，物事を多角的に見られる視野の広さ，柔軟性，多様性は，長い人生の道のりにおいて必要な力の源であり，人間だからこそ持てる力であり，また社会を築く上で，不可欠であると考える。そうした力を得る過程を，私たちは“踏みしめる”という言葉で表現したい。

私たちが考える視野の広さとは，「今」や「先」を指す広さのみならず，過去の事実や自己の経験も含めた広さである。何かにつまずいた時，現時点での失敗ばかりを気にして解決できない人間が多いと感じる。それはまさに，視野の広さが欠如しているからではないだろうか。

また，今日の最新技術は，経済レベル・生活レベルの向上に大きく貢献しているが，その反面，“真新しさ”に注目しすぎて，人間の持つ本来の力を見失い，曖昧で単純な人間形成を今の私たちは展開してしまっているのではないだろうか。つまり，一人の人間形成において必要な“ひと本来が持つ力”が不明瞭になりつつあると考える。「今」や「先」が存在するのは，過去の土台があって築かれていることを，私たちは忘れていないだろうか。

今現在の便利さが当たり前になってしまった時代に生まれた私たちには，自分が築いてきたものを見つめ直し，視野の広さについて問う必要がある。そのうえで，新しい物事のみならず，古い事柄も学ぶ機会が大切になる。過去とは，単なる昔の出来事や考えというものではなく，新たな時代に活かせる深い示唆を与えてくれる価値のあるものだと私たちは捉えている。

今回『東海道』を人生にたとえ，以上のような側面から一歩一歩探求し，共に踏みしめながら，参加者に訴えたい。それは，……

自立の原点とは何か。たとえ小さな一歩でも自らが突き進んで何かを得ようとし，それを得ることができる時までの過程を“踏みしめる”とするなら，『自ら進んだ』という点，『能動的な自立』が達成され，まぎれもない自分自身の力として確立されるのではないだろうか。そして，自分が歩んできた道を振り返り，かつての人々が培ってきたものをじっくりと見聞して，失いかけた力の醸成，総合的な視野の拡大を図りたい。さらにそこから，自らの生き方を考え，今まで出会ったことのない力の存在を確信させ，高い理想や将来への展望を持つ力を，このイベントで提供していきたい。】[15] であった。

テーマを“踏みしめる”とし，「視野の拡大」と「力」の２つの視点から今回の「東海道五十三次ウォーク2006」を捉えた。行程設定の背景と照らし合わせて考察すると，根底に脈々と流れる今回の基本的な理念は「自己の力」であると思われる。このイベントに関わるすべての人々に，上記２つのキーワードを提供する狙いが窺える。この２つは何を意味するのだろうか。現代社会に在る我々にとって大切なものであり，現代社会を生きる我々にとって必要不可欠なものであると考えれば，それは「生きる力」であろう。

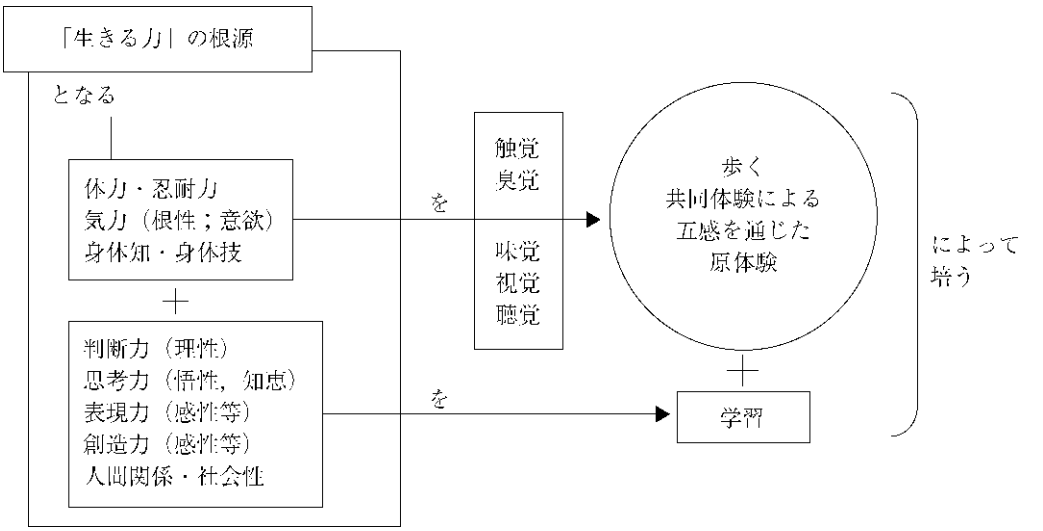
青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議における「青少年の野外教育の充実について」の報告（概要）[16] によれば，21世紀は，国際化，情報化，科学技術の発展，価値観の多様化など，これまで以上に社会の激しい変化が予想されるとし， 平成８年７月における第15期中央教育審議会の第一次答申においては，これからの教育の在り方として，「生きる力」を育成することが重要であることが指摘されている。そして，「生きる力」とは，「いかに社会が

変化しようと，自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質能力であり，また，自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性であり，そして，また，たくましく生きていくための健康や体力である」としている。また同答申では，「生きる力」の育成方策のひとつとして，青少年の生活体験・自然体験の機会の増加を求めている。

上記報告から，教育として自然体験活動を捉える野外教育の充実は，青少年の「生きる力」を育成する上で極めて重要であると考えられている。

また，野外教育への期待として，心身の調和のとれた青少年を育成するためには，家庭，学校，地域社会それぞれの場において，青少年が自主的，主体的な活動体験を豊富に積み重ねることが必要であるとされ，かつては，自然との触れ合いや異年齢の交流など，日常的な遊びが，青少年の人間形成に重要な役割を果たしてきたのであるが，今日の社会の進展や生活の変化に伴い，青少年にとってそのような遊びの機会や場が減少してきたことは否めない。このため，意図的，計画的に，青少年に様々な体験の機会を提供する必要性が生じてきているとしている。

特に，青少年にとっての野外教育は，自然の厳しさや恩恵を知り，動植物に対する愛情を培うなど，自然や生命への畏敬の念を育て，自然と調和して生きていくことの大切さを理解させる機会を与えることとなる。さらに，自然の中での組織的な活動は，きまりや規律を守ること，協力することの大切さや，自ら実践し創造する態度を学ぶなど，体験活動を通じた総合的学習の機会を提供するもので，青少年の育成にとって極めて有効であるとされている。この考え方




**図表 8**　五感を通じた原体験と学習による生きる力の養成

出典：文部省〔子どもと話そう〕全国キャンペーン協力事業
「子どものウォーキング」フォーラム　テーマ：歩く喜びを通じて生きる力を
2000年１月30日（日）於：早稲田大学大隈講堂
村山友宏氏「歩く五感体験学習のすすめ」会議資料18ページより引用。

は，現在の大学教育にも通ずるものであると思われる。

東海道五十三次ウォークによって培われるものは何か。それは，共同で歩く経験を通して，「触覚・臭覚・味覚・視覚・聴覚などの五つの感覚を通じた原体験」と各行程に組み込まれている，歩くだけではない「学び」の環境設定から，体力・忍耐力，気力（根性：意欲），身体知・身体技及び判断力（理性），思考力（悟性，知恵），表現力（情緒・感性など），創造力（感性など），人間関係・社会性を含んだ「生きる力」の源の要素を学び取ることである。図表8を参照されたい。

学生実行委員からこの企画書が提出されたのが平成17年7月7日（木）であった。本番実施1年前である。大学側は，「東海道五十三次ウォーク」が大学行事として位置付けられているイベントであったとしても，学生からの発意に基づいて行われるよう配慮している。その結果，学生実行委員は，すべての企画・運営に関して主体的に取り組む姿勢が芽生えてくるのである。つまり，自覚と責任である。それを導き出そうとすることもひとつの教育的配慮からなのである。上から指示を受けてやらせられている状態での運営と自主的な運営に基づいて行われている状況とでは，明らかに学生実行委員の「言動」が異なってくる。

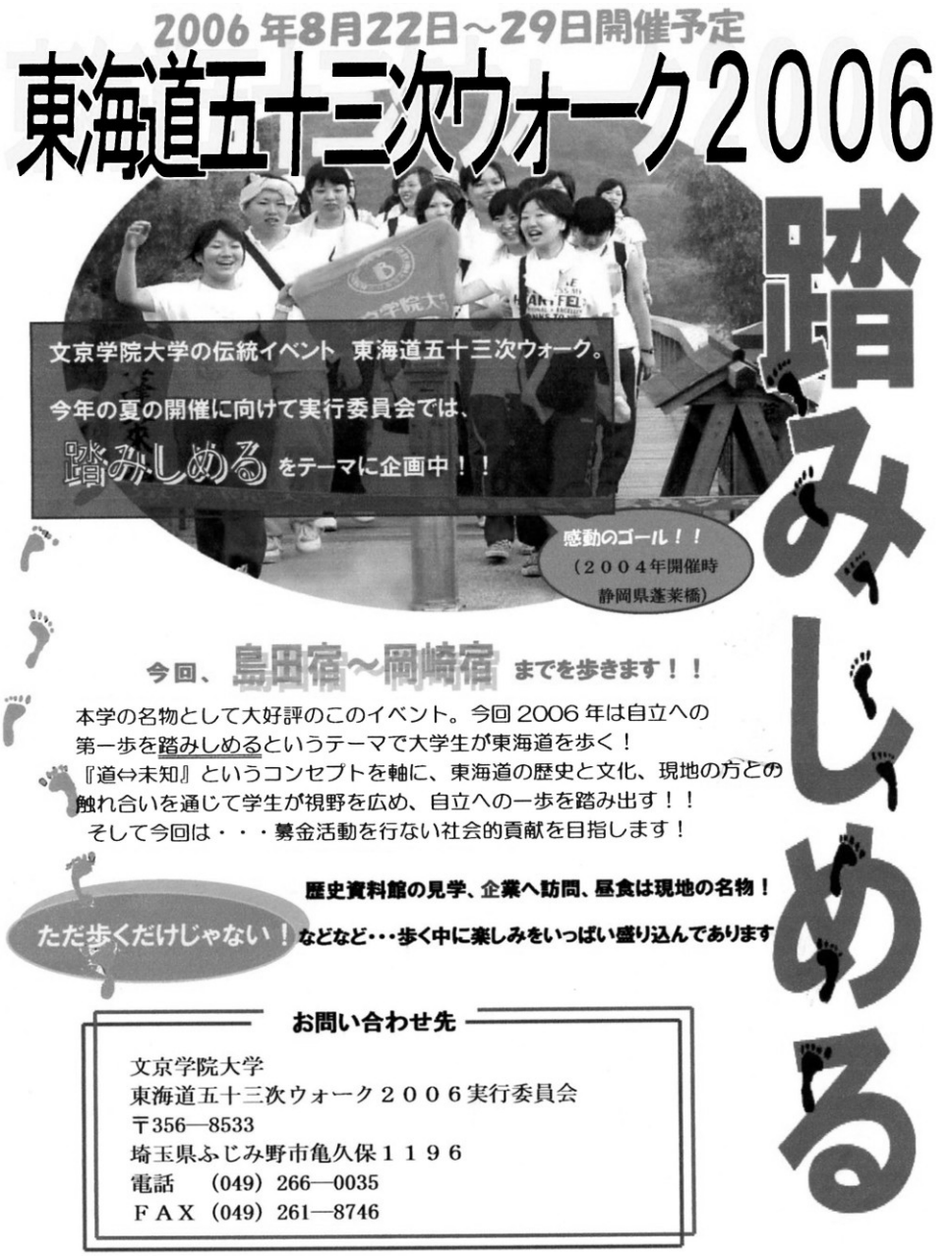
以上を踏まえると，「東海道五十三次ウォーク2006」にテーマ及び基本的なコンセプトを設定したことは，ただ単に「歩く」ということから一歩進み，「旧東海道」という環境設定の中で，「ウォーキング」を手段として「ある」目的を達成するために行われたものとして捉えることができる。このプロセスはただ単に経験だけにとどまらせるだけの行事ではないことを意味している。

次項の資料は，テーマ，コンセプト，日程などの概要を示した広報用に作成したチラシである。

### 2―4　ウォーキングが人や社会にもたらす効果

平成16年2月，内閣府大臣官房政府広報室「体力・スポーツに関する世論調査」における「運動スポーツの実施状況と今後の意向について―この1年間に行った運動・スポーツの種目，今後行ってみたい運動・スポーツの種目」によると，この1年間に行った運動やスポーツは「ウォーキング（歩け歩け運動，散歩などを含む）」が37.2%，「体操（ラジオ体操，職場体操，美容体操，エアロビクス体操，縄跳びを含む）」が15.9%，「ボウリング」が13.2%，「軽い球技（キャッチボール，円陣パス，ピンポン，ドッジボール，バドミントン，テニスなど）」が11.9%，「ゴルフ」が8.3%となっている（上位順）。前回の調査結果と比較して見ると，「ウォーキング（歩け歩け運動，散歩などを含む）」（33.8%→37.2%）を挙げた者の割合が上昇している。

今後行ってみたい運動・スポーツの種目の項目にて現在行っているものを含めて，今後行ってみたい運動やスポーツがあるか聞いたところ，「ウォーキング（歩け歩け運動，散歩などを含む）」が39.8%，「軽い水泳」が17.8%，「体操（ラジオ体操，職場体操，美容体操，エアロビクス体操，縄跳びを含む）」が15.0%，「軽い球技（キャッチボール，円陣パス，ピンポン，




**図表 9** 東海道五十三次ウォーク2006広報用資料
出典：東海道五十三次ウォーク2006実行委員会資料より引用。

ドッジボール，バドミントン，テニスなど)」が12.6%，「ボウリング」が10.3%となっている。[17]

以上から，一般市民のウォーキングにおける関心は高いと考察でき，今後もウォーキング人口の増加が予測される。このような現状から社団法人日本ウォーキング協会は，老若男女を問

わずより多くの方々に，ウォーキング運動を推進している。

社団法人日本ウォーキング協会によると，ウォーキングが人や社会にもたらす効果として，「環境」「観光」「交流」「教育」「健康」などのキーワードの頭文字から「５つのK」を提唱している。

①地球に優しいから　*「環境」*に効く＝自然との触れ合いによる環境学習効果，
クルマ自粛による地球温暖化抑制効果

②歩く目線に帰るから　*「観光」*に効く＝国土・郷土再発見効果，地域・街の活性化効果

③歩く原点のふれあいが*「交流」*に効く＝国際親善効果，歩く市民外交効果，
歩いて触れ合うコミュニティ緊密化効果

④歩く五感体験が　*「教育」*に効く＝子どもの発達歩育効果，
歩く旅による「生きる力」涵養効果

⑤ヒトの基本に帰るから*「健康」*に効く＝生活習慣病の予防効果，寝たきり防止効果，
脳活性化・心身爽快・癒し効果，
医療費財政負担軽減効果

今やウォーキング人口は3700万人といわれる。社団法人日本ウォーキング協会は，ウォーキ

**図表10**　ウォーキングが人や社会にもたらす効用

出典：社団法人日本ウォーキング協会広報資料「人も社会も元気にするウォーキング運動」より引用。

ングを21世紀の国民最大の生涯スポーツとして全国的普及を展開している。

また，全国各地のウォーキング協会は，なかなか浸透しにくい小中学生にも「歩行」を広げていくことを狙いとして，各都道府県体育協会に加盟する動きを進めている。さらに，全国を統括する日本ウォーキング協会は2006年８月から指導員養成に本格的に乗り出し，ゆくゆくは体育の授業など学校教育にもウォーキングを取り入れる構想を描いている。

日本ウォーキング協会は2005年から地方のウォーキング協会に対して各都道府県体育協会への加盟を呼びかけてきたが，2006年３月までに島根と山口で県体育協会加盟を果たし，年内には計６協会が体育協会入りする見込みである。さらに日本ウォーキング協会本体も，日本体育協会に加盟したい意向を示している。

前述したとおり，内閣府の世論調査では「ウォーキング」に対する関心が非常に高いことが窺える。しかしながら，低年齢層，特に小中学生のウォーキング実施者は少なく，また各ウォーキング協会が実施するイベントへの参加率も低い。一方，予防医学の側面や運動の基本となる「歩行」の重要性が見直され始めている。日本ウォーキング協会の木谷道宣専務理事は「遠足もなくなってきた今，しっかりした歩き方を学校で学ばせたい。体育協会に加盟すれば，学校の教員が指導員の資格を取得し，体育の授業で教えられるようになる」と述べている。しかし，順位やタイムを競わないウォーキングはレクリエーションとして捉えられ，競技スポーツではないとする考え方が根強いこと，また日本ウォーキング協会が環境省と厚生労働省の所管法人であるため，「日本体育協会に加盟するには，文部科学省の認可団体でなければ難しいのでは」との日本体育協会関係者の声もある。(18)

いずれにせよ，「歩行」の重要性とウォーキングが人と社会に及ぼす効果を考えると，「東海道五十三次ウォーク2006」は学生教育の手段として実施されているものではあるが，上述したように「環境」「観光」「交流」「教育」「健康」など，多方面からその重要性があると考えられる。

### 2―5 「東海道五十三次ウォーク2006」の行程とその背景
### ―学生実行委員の想いと参加者へ伝えたいこと―

何故そこを歩くのか。それには理由が要る。学生実行委員に行程の設定とその理由を考えさせてみた。検討の結果，それは「島田宿（静岡県）～岡崎宿（愛知県）」に設定された。
このルート設定に至る経緯を学生実行委員の言葉を用いて述べていく。

【ルート設定の背景は『発展』と『人の力』。この２点からなる。

前者は，技術の発展や進歩が見られる場所，またそれらの先駆的な場所として取り上げられていること。その理由として，愛知で開催された「愛地球博」は世界各国が参加する博覧会であり，種々の産物を展示して，一般の人々の観覧や購買を促進し，産業・文化の振興を見るための会である。そこでは最先端技術に触れることができる。だが愛知は，日本で代表される２大都市，東京・大阪の間に位置しており，人々の視線は２大都市独自の最先端の技術にいきや

すい。そのため，見落とされがちな愛知の歴史と文化に触れる良い機会として，私たちは注目したいと考える。つまり，今回のルートは意外な底力と魅力を発見できる環境といえる。

後者は，人の力で作られたものがあることである。それは，道である。道は，人が歩いた証であり，そこには人々の生活がある。『東海道』は昔，政治的，軍事的に極めて重要な交通路であった。それと同時に人々の生活とも密接に関わる幹線道路であり，東海道，中山道，奥州道中，甲州道中，日光道中の５街道の中でも東海道の交通量は極めて多く，街道筋は繁栄した。そうした道としての原点であり，当時の人々の生活基盤である東海道を歩くことによって，いにしえの名残を数多く見出せる。大きく変貌を遂げ，かつての東海道を想起したときに長い時間の経過を感じることができる。

## ☆東海道五十三次ウォーク2006☆
## ～“道=未知”を踏みしめる！！～

**コース詳細一覧**

| 区間（定員） | 月/日(曜) | 旅程 | 歩行予定 | 見所・訪問先 | ♪あなたへの一言♪ |
|---|---|---|---|---|---|
| 1区 | 8月23日(水) | 島田宿～日坂宿 | 19.4km | 蓬莱橋・島田市博物館・石畳茶屋・菊川の里・小夜の中山峠・旅籠・事任八幡宮 | 東海道難所の一つ，小夜の中山峠を越えるなど，昔の風景を満喫できるルートです!! |
| 2区 | 8月24日(木) | 日坂宿～袋井宿 | 19.9km | 事任八幡宮・諏訪神社・掛川城址・資生堂アートハウス・どまんなか茶屋 | 人の力の大きなスケールを感じられるのはこの区しかない！大河ドラマの舞台掛川城，ヒット商品を飛ばし続ける資生堂の原点を探る！そんな旅はいかが？ |
| 3区 | 8月25日(金) | 袋井宿～浜松宿 | 22.1km | 袋井宿場公園・旧見付小学校・金原明善記念館・浜松アリーナ・浜松城址 | 歴史の移り変わり…昔の学校や病院と，昔から残る建物を見学し，今と昔の違いを体験しませんか？？ |
| 4区 | 8月26日(土) | 浜松宿～新居宿 | 18km | 浜松城址・村社八幡神社・諏訪神社・春日神社・松並木・舞阪宿脇本陣・弁天島・新居関所資料館・新居関所 | 今回東海道で唯一の海を満喫でき，江戸時代大名が宿泊した本陣を見学してみませんか？？ |
| 5区 | 8月27日(日) | 新居宿～二川宿 | 16.1km | 新居関所・蔵法寺・おんやど白須賀・豊田佐吉記念館・二川宿本陣資料館 | 新居を抜けて潮見坂を登ると海を見下ろすすばらしい景色が広がります。昼食は自動車メーカーのTOYOTAで有名な豊田佐吉記念館の中庭で召し上がれ！ |
| 6区 | 8月28日(月) | 姫街道 | 19km | 橘神社・本坂峠・豊橋ケアセンター・豊川駅・豊川稲荷 | 東海道と縁の強い姫街道☆車も入れない自然たっぷりの道を一緒に歩いてみませんか？？ |
| 7区 | 8月29日(火) | 御油宿～岡崎宿 | 22.5km | 松並木資料館・旅籠大橋屋・藤川資料館・専光寺・旅籠公園・八丁味噌の郷・岡崎城址 | 江戸時代，一般人が宿泊していた今も営業中の旅籠屋(旅館)，そして有名な八丁味噌の工場を見学!! |

**図表11**　東海道五十三次ウォーク2006行程表（コース詳細一覧）

そのような経験を通して，普段気が付くことのなかった人々の歩みや，一人ひとりの力によって創られてきた現代，そして技術の発展を知ることができる。このように未来（将来）も，過去や現在のように一人ひとりの存在が意味を持ち，その価値が活かされ，創られていくものであろう。しかし現代において，自分の存在理由や価値，または可能性を見出せずにいる人が大勢存在する。そのため，広い視野を持って過去を未来（将来）を，そして今の自分を見つめ返していくことで自己とは何かを問い直し，一人ひとりの価値というものを見つめ直していきたい。

そうした機会を提供できる場所として，私たちはこのルートを設定するに至った。】(19)

以上が学生実行委員会から導き出された，行程の設定における背景である。

学生実行委員は，今回の東海道五十三次ウォークを「発展」と「人の力」という２つの点に焦点をあて，そこから「自己の存在価値」を見出そうとしている。一般参加者だけではなく，実行委員も含めてこの教育研究プログラムに関わるすべての人々に，ただ歩くだけではない目的を持たせつつ，行程を設定した。これは旧東海道とウォーキングを手段として，建学の精神である「自立と共生」を具現化する，まさしく教育的配慮に基づいた考え方である。前項の図表11に，区間，日程，旅程，歩行予定距離，見所・訪問先，参加者へのメッセージの概要を表したコース詳細一覧を示す。参照されたい。

## 第３章　「東海道五十三次ウォーク2006」の財政基盤

### 3―1　大学教育高度化推進特別経費

#### 平成17年度私立大学教育研究高度化推進特別補助審査要領

私立大学教育研究高度化推進特別補助は，世界水準の優れた私立大学作りを目指す観点から，優れた教育研究を実践する卓越した大学院への支援（大学院高度化推進特別経費），先端的・先導的学術研究の推進（学術研究推進特別経費），学部における教育の質の向上や教育システムの改善（大学教育高度化推進特別経費），教育研究の高度情報化の推進（高度情報化推進特別経費）など，意欲と可能性に富んだ私立大学への重点的支援を行い，私立大学における教育及び学術研究の飛躍的向上を図ることを目的としている。

その大学教育高度化推進特別経費は各大学等の規模地域性等を考慮して評価され，「教育・学習方法等改善支援経費」「教養教育改革推進経費」「国際化教育」の３部門に分けられている。さらに，教育・学習方法等改善支援経費は第一系，第二系，第三系の目的別の５つの分野に分類されている。(20)

「東海道五十三次ウォーク2006」は運営協議会，教授会の議を経た後，教育・学習方法等改善支援経費における領域で，以下２つの分野に属するものと評価され，文部科学省より支援を得ている。

第一系（ニ）学生の実体験を重視した教育研究

（教育的に意義の深い体験活動を実施し，当該活動が学部等の教育研究に有機的にフィードバックされるなど，その成果が顕著と見込まれるもの。EX：学生の地域社会への参加活動，各種体験学習，野外調査活動，フィールドワーク，社会奉仕活動，ボランティア活動，合宿教育など）。

第二系（ホ）豊かな人間性を育成するための教育等，独創的で顕著な成果を挙げている特色ある教育

（学生の自立心，自己抑制力，責任感，連帯感，思いやりの心等を涵養するなど豊かな人間性を育成するための教育や，それぞれの建学の精神を踏まえ，独自の教育理念や教育目標を反映した特色ある教育研究の実施に係るもので，その成果が顕著と見込まれるもの。EX：伝統文化を通した情操教育・人権教育・道徳教育・学生の意識を高めるための人間教育に関するもの，地域社会と密着した生涯学習ニーズへの対応を図るなど地域に開かれた質の高い教育研究の実施に関するもの，わが国の高等教育の改革・発展を先導する有意義な教育研究上の取り組みに関するもの，建学の精神を達成するために特色ある教育研究に関するものなど）。

採択状況については，教育・学習方法等改善支援分が申請校613校，申請件数2544件の内，採択件数は2437件で90.5％の採択率となっている。系統別に眺めてみると，（ニ）学生の実体験を重視した教育研究については，申請件数471件中，採択件数は452件で92.0％。（ホ）豊かな人間性を育成する等独創的で顕著な成果を挙げている特色ある教育については，申請件数459件中，採択件数は440件で91.0％であった。(21)

実施学部は全学部となっており，この計画終了予定年度は平成20年度となっている。その後，この教育研究が継続となればこの計画終了予定年度は先送りされる。

教育プログラムを運営し，教育研究を進めていくためには「人・もの・金・情報」などのマネジメントが必要となるが，この大学教育高度化推進特別経費・私立大学教育研究高度化推進特別補助が，東海道五十三次ウォークの実施にかかる財政的基盤となっている。一般参加者にかかる費用に関しては受益者負担となっている。

次々項より，

①平成17年度教育・学習方法等改善支援経費―教育・学習方法等の改善計画書―事業概要：目的，内容，計画，期待される成果―

②平成17年度教育・学習方法等改善支援経費―教育・学習方法等の改善計画書―平成14～17年度までの経過報告―

③平成17年度「教育・学習方法等改善」に係る所要経費内訳明細票

④平成17年度教育・学習方法等改善支援経費―教育・学習方法等の改善計画書

添付書類―建学の理念及び申請課題との関連―

⑤平成17年度補助事業成果報告書

―平成17年度分補助事業の取り組み状況とその成果―

以上５点の，大学教育高度化推進特別経費・私立大学教育研究高度化推進特別補助に関する事項を報告する。

## 3―2　平成17年度教育・学習方法等改善支援経費―教育・学習方法等の改善計画書
## ―事業概要：目的，内容，計画，期待される成果―

大学教育高度化推進特別経費　　様式５－１

### 平成17年度 教育・学習方法等改善支援経費ー教育・学習方法等の改善計画書

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 実施学校名 | 文京学院大学 | | | 整理番号 | 件中　件目 | | |
| 文部科学省選定事業名 | 教育・学習方法等改善支援経費 | | | 選定・採択初年度 | | | |
| 課題名 | 第５回東海道五十三次ウォーク | | | 新規 | 16 文科省 | 15 文科省 | 14 文科省 |
| | | | | | 16 改善 | 15 改善 | 14 改善 |
| 実施学部等名 | 全学部 | 審査区分 | ニ　ホ | | 16 高等 | 15 高等 | 14 高等 |
| 二つ以上の学校に共通する課題（いずれかに○を付すこと） | 有（　　）・無 | | | 計画終了予定年度 | 平成　20　年度 | | |

事業の概要（計画期間全体）（各５行以内）

○目的

「自立の第一歩は自分の足で歩くことから始まる」これは本学島田学長の言葉である。

人間が日常生活を営み、身体活動を行う上で最も基本となるものが歩行である。しかし、現代社会では、歩くことが極めて減少し、生活習慣病の誘因ともなっている。本企画は、東海道をキーワードとし、参加型、体験型の環境教育プログラムを提供することにより、現代社会を生きぬく上での必要なスキルを身につけ、「自立と共生」の精神を学ぶことを目的としている。

○内容

今回は、「島田宿から岡崎宿」の旧東海道地区をウォーキングする。行程中に史跡や名称の散策、地場産業での研修、福祉施設等でのボランティア活動、地域との交流等「歴史」、「文化」、「ボランティア」、「交流」いずれかの要素を組込む。また、各区間は「校旗」と「手形」の引継を行い、駅伝リレー方式で繋いでいくことで、参加者の結びつきを強め、帰属意識の涵養を図る。

○計画

第5回となる今回のイベントは、昨年9月、及び今年2月の下見経験を踏まえ、本番となる8月に向けて島田宿から岡崎宿までの7区間の行程を吟味し、環境教育的配慮のある内容を検討する。テーマを「道⇔未知」とし、詳細な行程内容を決定した後、4月からは参加者募集、オリエンテーション、訪問先の決定と交渉、広報活動、予算申請等々の業務を行い、万全の体制で本番に臨む。以上を学生、教員、職員の3者が協働して遂行する。

○期待される成果等

過去4回の経験をもつこのイベントに参加した学生、教員。職員、OG,関係者のアンケート調査からは、「自立」「交流」「帰属意識」などの意識が高まったことが明らかとなっている。また、現代社会に必要とされる「協力」「公正」「責任」などの社会的スキルの習得にも寄与している。この参加型環境教育プログラムにより自然を大切にと理解するだけではなく、自然や環境のために行動できる人を育成することができる。

| 平成17年度所要経費 | 2.941　千円 |
|---|---|

| 本計画書作成担当者・所属・氏名・連絡先電話番号 |
|---|
| E-Mail： |

※本様式をフロッピーディスクにコピーし、紙とともに提出すること

| 学校法人番号 | 学校法人名 | 学校名 |
|---|---|---|
| | | |

## 3―3　平成17年度教育・学習方法等改善支援経費―教育・学習方法等の改善計画書
## ―平成14～17年度までの経過報告―

大学教育高度化推進特別経費　　様式５－２

### 平成17年度 教育・学習方法等改善支援経費ー教育・学習方法等の改善計画書

（　　件中　　件目 ）

| 課　題　名 | 第5回東海道五十三次ウォーク | 審査区分 | ニホ |
|---|---|---|---|

事業の概要（詳細）または成果（数値データを用いる等、分かりやすく簡潔に記入ください）（各７行以内）

（１年目）
翌年の本開催に向け、実行委員による富士山登頂、街道の状況調査等の実地踏査を行い、本企画のコンセプトである東海道ウォーキングを通しての自然との触れ合い、地域社会との交流、共生社会の実体験の可能性を確認した。前記に基づき、実行委員の役割分担及び日程・期間、歩行区間、活動内容等の詳細プログラムを検討し、設定が完了、準備が整った。実行委員は組織活動の中で多くのノウハウを学習、成長できた。

（２年目）
第４回東海道５３次ウォーク実施。「心の豊かさを求めて～旧東海道 川と峠・富士山」をテーマとして１０日間の企画が終了。掛川宿～小田原宿まで区間参加者全員が完歩。富士山では悪天候のため登頂は果たせなかったが、その他のプログラムはすべて順調で内容も充実していた。特筆すべきは、第1に、学生主体に徹して、ふじみ野の学生実行委員と本郷の学生実行委員、両キャンパスが一つになり、「オール文京」に広がった。第2に、自発的な参加のため参加学生のマナーも良く、高い外部評価を得た。加えて、学生実行委員の主体的な企画運営に対し、それを失うことのない様、教職員が自然にサポートしたことは、教育的配慮が伺える。まさに「自立と共生」を体験的に学べた行事であった（参加計約３００名）。

（３年目）
前年の本開催を総括。参加者アンケートの分析・検討を行い、実行委員による報告会の実施及び記念誌を発行した。本企画は実行委員の引継等を考慮、次回からは隔年開催とすることとなり、本年度は翌年の本開催に向けた準備期間とした。基本コンセプト・テーマの設定、歩行区間・宿泊先・訪問先・活動内容の選定、参加者募集要領の策定、実行委員の組織編成を行い、下見・実地踏査を実施する。作業はすべて学生と教職員との共同ワークとなった。尚、人間学部教授会および文京学園80周年記念講演にて本企画が成功裏に終了したことを含む口頭発表を学生実行委員により行われた。

（４年目）
平成１８年度に「第５回東海道五十三次ウォーク」を開催する。下見の調査結果に基づき、タイムテーブルを策定し、早期に参加者募集活動を開始する。また、マスコミ等への広報活動を展開し、協力者・団体を獲得する。各区間とも参加者を主体とする魅力ある企画を盛り込み、参加者を広げ、大学全体のみならず文京学園のイベントとしたい。そのため、教育効果の高い参加型環境教育プログラムとして内容の充実を図ることが必要である。また、実施前後においては参加者の主体的な評価（ポートフォリオ評価）を組み込み、自然環境に対する「気づき～責任ある行動へ」の態度を育成する。

| 本計画書作成担当者・所属・氏名・連絡先電話番号 |
|---|
| E-Mail : |

| 学校法人番号 | 学校法人名 | 学　校　名 |
|---|---|---|
| | | |

## 3―4　平成17年度「教育・学習方法等改善」に係る所要経費内訳明細票

大学教育高度化推進特別経費　　様式５－３

### 平成17年度　「教育・学習方法等の改善」に係る所要経費内訳明細表

（　　件中　　件目　）

| 課題名 | 第5回東海道５３次ウォーク | 審査区分 | ニホ |
|---|---|---|---|

| 教育研究経費支出内訳 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 小科目 | 平成17年度実績見込額 | 積算内訳 主な使途 | 金額 | 主な内容 |
| 消耗品費 | 200 千円 | 文具、杖等用品 | 200 千円 | 資料作成、イベント用品 |
| 光熱水費 | | | | |
| 通信運搬費 | 50 | 郵便、宅配便等 | 50 | 資料送付、連絡 |
| 印刷製本費 | 1,089 | 記念誌 | 1,089 | 第4回総括、記念誌 |
| 旅費交通費 | 1,500 | 宿泊・運賃 | 1,500 | 下見、実地踏査 |
| 賃借料 | | | | |
| 報酬・委託料 | | | | |
| （　　） | | | | |
| （　　） | | | | |
| 計（A） | 2,839 | | 2,839 | |
| アルバイト関係支出（記入の仕方に注意） | | | | |
| 人件費支出（兼務職員） | 千円 | | 千円 | 別紙（様式５－４）に記入のこと |
| 教育研究経費支出 | | | | |
| 計（B） | | 小計（A＋B） | | 千円 |
| 設備関係支出（１個又は１組の価格が500万円未満のもの） | | | | |
| 教育研究用機器備品 | 102 千円 | | 102 千円 | 別紙（様式５－５）に記入のこと |
| 図書 | | | | |
| 計（C） | 102 | 小計（A＋B＋C） | | 102 千円 |
| 収入内訳（反対給付がある場合） | | | | |
| （　　） | 千円 | | | |
| （　　） | | | | |
| 計（D） | | | | |
| 所要経費［(A+B+C)-D］ | 2,941 千円 | | | |

| 本計画書作成担当者・所属・氏名・連絡先電話番号 |
|---|
| E-Mail： |

| 学校法人番号 | 学校法人名 | 学校名 |
|---|---|---|
| | | |

## 3―5　平成17年度教育・学習方法等改善支援経費―教育・学習方法等の改善計画書 添付書類―建学の理念及び申請課題との関連―

大学教育高度化推進特別経費　　様式５－６

平成17年度 教育・学習方法等改善支援経費－教育・学習方法等の改善計画書 添付書類

（　　件中　　件目 ）

| 課　題　名 | 第5回東海道５３次ウォーク | 審査区分 | ニホ |
|---|---|---|---|

**建学の理念（教育方針）（分かりやすく簡潔に記入ください）**

1924年、「女性に自立の力を」という理念を掲げて、創立者・島田依史子が文京区本郷の地で教育を始めたことから、本学の歴史は始まる。以来その精神を継承しつつ、女性から人間へと視野を広げ大学３学部での男女共学化を実施するとともにさまざまな教育活動を実践してきた。
本学の掲げる「自立と共生」の精神は、21世紀のグローバル社会において欠かせないものとなっている。国境、人種、性別、年齢などの違いを越え、平和な関係を築くためには精神的にも経済的にも自立し、「共に生きる」ことが求められている。
本学は、こうした時代の要請に応え、また、社会の変革に柔軟な姿勢で対応し、理念を形にすべく新しい学びの場の創造を目指して種々取組みを進めている。

**建学の理念と申請課題との関連（分かりやすく簡潔に記入ください）**

人間が日常生活を営む上で、また身体活動を行う上で最も基本となるものが歩行である。しかし、現代社会においては、歩くことが極めて減少し、生活習慣病の誘引ともなっている。同時に、都市部では徐々に緑が奪われ、その結果自然との触れ合いも少なくなりつつある。このような背景から、現代社会を生きる我々にとって歩くことの意味を再認識することが必要と考えられる。
本教育研究は、旧東海道のウォーキングを通して人間が自然環境の一部であることを認識し、なおかつ、地域の人々との交流から共生社会を肌で感じ、学びとる参加型環境教育プログラムである。このイベントから建学の理念である「自立と共生」を認識し、生きる力を育んでいく。
①伝統継承：過去4回の実績を誇る東海道５３次ウォークの継続。
②社会貢献：歩くことを通して自然、環境問題、共生について考え、地域との交流を図り、ボランティア活動に参加する。
③教育理念：学生の実体験を通した教育の充実を図り、生涯にわたる自己実現に向けたきっかけ作りを大学教育の一環として行う。

注．本計画書は、分類ホのうち「建学の理念及び教育目標を達成する教育」に該当する場合のみ提出すること

| 本計画書作成担当者・所属・氏名・連絡先電話番号 |
|---|
| E-Mail： |

| 学校法人番号 | 学校法人名 | 学校名 |
|---|---|---|
| | | |

## 3―6　平成17年度補助事業成果報告書

### ―平成17年度分補助事業の取り組み状況とその成果―

# 補助事業成果報告書

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 法人番号 | １３１１１７ | 法人名 | 学校法人文京学園 | 学校名 | 文京学院大学 |
| 内定番号 | | 補助項目 | 高等教育研究改革推進経費 | | |
| 教育研究課題名 | 第5回東海道五十三次ウォーク | | | | |

**１．補助事業の取組状況（５００字以内）**

2年に1度開催されるこのイベントは、学生・教員・職員の3者協働による大学行事として位置付けられており、人間学部、経営学部、外国語学部、短期大学（平成18年度からは保健医療技術学部）など学部の垣根を越えた全学部・全学科体制で実施される本学の名物行事となっている。「自立の第一歩は、まず自分の足で歩くことから始まる」を基本的な理念とし、本学の建学の精神である「自立と共生」を具現化するひとつの教育的プログラムである。第4回東海道五十三次ウォークが2004年に開催され、第5回東海道五十三次ウォークは、2006年の8月に実施予定となっている。そのため平成17年度（2005年度）はその本番実施に向けた“準備期間”としての意味合いを持つ。

具体的取り組み状況は以下の通りである。

①学生・教職員実行委員会体制の確立
②テーマ及び基本コンセプトの設定
③歩行区間の決定
④実施日程の検討
⑤参加者募集方法と参加人数の確定
⑥広報活動
⑦下見の実施　　などが挙げられる。

尚、本行事は夏期に実施されるため、参加者及び運営する実行委員の「事故・怪我対策」「危機管理体制」を十分に整え安全を第一に考えながら実施して行きたいと考えている。

**２．補助事業の成果（５００字以内）**

平成18年度の本番に向け、以下のような具体的作業が進められた。その成果を報告する。

① 学生・教職員実行委員会体制の確立
実行委員会の新体制を確立。学生実行委員26名、教職員実行委員15名、計41名で構成。

② テーマ及び基本コンセプトの設定
人間が自立し、人生の目標に歩んでいくためには自己を成長させる鍛錬が必要となることを踏まえ、テーマは「踏みしめる」とされた。各歩行区間には「地域との触れ合い」「企業見学」「社会貢献」などの要素を組み込み、ただ歩くだけではない「学びの場」を設けた。参加費の一部を募金する社会貢献的な意味合いも兼ね備えている。

③ 歩行区間・歩行場所・日程・参加人数
行程：島田宿〔静岡県〕～岡崎宿〔愛知県〕。日程：8月23日〔水〕～29日〔火〕。全行程を7日〔7区間〕に分け駅伝リレー方式で歩行。引継ぎ時には手形と校旗を継承。1日の歩行距離：約15KMと設定。参加人数は各区間30名程度＋実行委員とし、総勢約３００名。

④ 広報活動
大学公式ホームページ、学内新聞への掲載作業。学内、外に情報を発信。

⑤ 下見の実施
9月4.11.12日（22名）、2月20～23日（22名）の2回、実踏調査を実施。

## おわりに

「人間の身体の中で一番大切なところ」

『私の母はよく私に「人間の体の中で一番大切な部分はどこだと思う？」と尋ねたものです。何年間も私はその答えを当てようとして，その時々に自分が正しいと思ったものを言ったものでした。私が小さかった頃，音が自分にとってはとても大切だと思っていたので「お母さん，耳でしょ。」と答えました。「いいえ。耳が聞こえない人はたくさんいますよ。もう少し考えてごらんなさい。」と母は言いました。数年たって彼女はまた同じ質問をしました。初めて答えたときから私は正しい答えをじっくり考えてきました。そこで今度は「目が見えることは誰にとっても大切なことだから身体で一番大切なのは目です。」と答えました。母は私を見て「あなたは覚えが早いわね。でも，目が見えない人もたくさんいるのだから，それは正しい答えじゃないの。」と答えたのです。再び途方にくれた私は，その後何年も答えを探し続けました。その間，母は何回か同じ質問をしましたが，母の答えはいつも「いいえ違います。でもあなたは年々賢くなっていますよ」でした。

昨年祖父が亡くなりました。皆心が痛み，泣いていました。父も泣いて，……私も泣きました。祖父に最後のお別れを言うとき，母が私のほうを見て言ったのです。「もう身体の中で一番大切な場所が分かったでしょう。」母がこんなときに質問をするなんてショックでした。私はその質問は母と私の間のゲームだといつも思っていたのです。私が戸惑っているのを見て母は言いました。「この質問はね，とても大切なの。あなたが実際に今まで生きてきたことを示しているの。今まであなたが答えた体の部分はどれも間違っていると言ってきたでしょう。例を挙げて理由も教えたでしょう。でも今日はこの大事な教訓を学ぶのにとてもいい日だと思うの。」母は母親にしかできない目つきで私を見ていました。母の目には涙が溢れていました。「身体の中で一番大切なところは肩なのよ。」と母は言いました。「肩は頭を支えているから？」と，私は尋ねました。「いいえ。肩は人が泣くとき友人の頭や，愛する人の頭を支えてくれるからなのよ。」と母は答えたのです。

「人は誰でも生きていく上で泣くときのために肩が必要なのよ。だからあなたにも必要なときにすがって泣けるような愛する人や友人をいっぱい持って欲しいの。」その場で私は身体で一番大切なところは利己的なものではないことを知りました。肩は人の痛みに同情的なのです。**人間は人が言ったことややったことはすぐ忘れるけど，感じさせてもらったことは決して忘れないもの**です。』(22)

アメリカのベストセラー作家のレイチェル・カーソンはその著書『センス・オブ・ワンダー』の中で，「子どもの世界は新鮮で美しく，驚異と感激に溢れている。不幸にも我々の多くは，成人する前に澄みきった洞察力や畏敬すべきものへの直感力を喪失してしまう。子ども時

代は**『知る』ことよりも『感じる』ことのほうがはるかに大切で**，情緒や感覚こそ，知識や知恵を育む土壌である」と記している。加えて，「**『知る』ことは『感じる』ことの半分の重要性しかない**」としている。(23)

今回実施された「東海道五十三次ウォーク2006」は，論述してきたように，行程設定とその意味，テーマとコンセプトを考えることなど，「歩く」すなわち「ウォーキング」を直接的な目的とするのではなく，それを手段として捉え，現在社会で問題となっている事柄を踏まえて，基本的な理念を明確に設定した。そのメッセージは果たして参加者の方々に届いたのか。また，この実践的教育プログラムに関わった人たちは，何かを『感じ』てくれたであろうか。

社会の課題に対してどうであったかという成果と評価を考察するところまではいかないであろうが，ひとまず，上記のような視点で「東海道五十三次ウォーク2006」が捉えられ，遂行されたことは一歩前進した野外教育プログラムといえるだろう。

最後に，全員が完歩し各区間が終了するたびに，学生実行委員と一般参加者，そして教職員スタッフ，地域の方々が，満面の笑みで，目頭を熱くしながら，堅い握手を交わしている光景と雰囲気をこの論文で伝えることができないことを非常に残念に思う。しかし，この行為は確かに，何かを『感じ』ているからに他ならないものだ。

この教育プログラムに対して，形骸化の感がある，または工夫の余地がある等々の課題は山積しているが，教育的に効果の高いプログラムであると判断できよう。

## 【注及び参考文献】


（1） 野外教育学会「日本野外教育学会ニュースレター」，No.35（Vol.9 No.4）2006年３月30日発行，３ページ。

（2） 文京学院大学パンフレット2004年，2005年，2006年版より。

（3） 青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議「青少年の野外教育の充実について（青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議・報告）」文部省生涯学習局青少年教育課審議会答申，「１．青少年と野外教育（1）野外教育とは１野外教育の概念」，1996年７月24日。

（4） 江橋慎四郎『野外教育の理論と実際』株式会社杏林書院，1997年，11ページ。

（5） 江橋慎四郎『前掲書』，11―13ページ。

（6） 江橋慎四郎『前掲書』，4―8ページ。

（7） 青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議（前掲報告）「青少年の野外教育の充実について」の「野外教育に期待される成果」，1996年７月24日。

（8） 日本教育新聞「環境教育とESDの『今』を探る」，2006年１月23日（月）13面。

（9） 阿部治ほか『持続可能な未来のための学習』立教大学出版会，2005年，ⅱページ。

(10) ESD「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議「ESD-J｜ESDとは？」 http://www.esd-j.org/whatsesd/ 2006/05/02

(11) 江橋慎四郎『前掲書』，22―24ページ。

(12) 江橋慎四郎『前掲書』，23ページ。

(13) 降旗信一ほか「持続可能な開発のための教育（ESD）と野外教育」日本野外教育学会第９回大会プログラム・研究発表抄録集，2006年，95ページ。
(14) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議（前掲報告）「２野外教育の現状と課題（1）野外教育プログラム」1996年７月24日。
(15) 「東海道五十三次ウォーク2006　企画書」東海道五十三次ウォーク実行委員会資料，【今夏のテーマ設定について】，平成17年７月７日（木）。
(16) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議「青少年の野外教育の充実について（青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議・報告）」文部省生涯学習局青少年教育課審議会答申，1996年７月24日。
http://www.mext.go.jp/b-menu/houdou/08/07960704.htm
(17) 内閣府大臣官房政府広報室「体力・スポーツに関する世論調査」における「運動スポーツの実施状況と今後の意向について―この１年間に行った運動・スポーツの種目，今後行ってみたい運動・スポーツの種目」，平成16年２月。
(18) 朝日新聞朝刊29面，スポーツ「学校にウォーキングを」，2006年４月22日（土）。
(19) 「東海道五十三次ウォーク2006　企画書」東海道五十三次ウォーク実行委員会資料，【ルート案】，平成17年７月７日（木）。
(20) 文部科学省ホームページ，大学教育高度化推進特別経費，平成17年度私立大学教育研究高度化推進特別補助審査要領。
(21) 文部科学省ホームページ，大学教育高度化推進特別経費，平成17年度私立大学教育研究高度化推進特別補助審査要領，採択状況。
(22) The Flagship November 2002「人間の身体の中で一番大切なところ」Newsletter ２ページ。
(23) 日本発育発達学会編『子どもと発育発達』株式会社杏林書院，2004年Vol.2 No.2，飯田稔「子どもに何故野外教育が必要か」，83ページ。
レイチェル・カーソン，上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社，1996年。

（2006.12.14受理）